

二〇〇四年聞一多国際学術研討会について

鄧 捷

聞一多研究は中国の現代文学研究において現在でも人気分野の一つである。マカオが返還された一九九七年、聞一多の詩「七子之歌」には曲をつけられ、返還行事のシンボルとして国中に響き渡った。そのため聞一多の名を冠したシンポジウムは近年来盛んに開催されている。特に聞一多誕生百周年の一九九九年前後には、北京・清華両大学を始め、人民大学、中央美術大学、武漢大学、さらに台湾清華大学やドイツのテュービンゲン大学でもシンポが開催された。日本聞一多学会も同時期に成立したものである。これら様々なシンポの中で、「国際学術研討会」と称して、継続的に行われているのは、中国聞一多研究会・聞一多基金회가開催する「聞一多国際学術研討会」である。前回九九年武漢・武昌首義飯店での会に続き、今回は武漢大学文学院などの協力で二〇〇四年八月二一～二三日、武漢大学で開催された。

「中国最大の県級市」と元首相朱容基に揶揄され、都市整備の乱雑さで有名な武漢ではあるが、珞珈山麓に沿い、東湖の湖畔に位置する武漢大学は広大で美しいキャンパスを持ち、聞一多ゆかりの地でもある。一九二八年に武漢大学が文学院を設立した時の初代院長は聞一多であった。また、武漢大学の校舎が現在の場所に建設された時、それま

で地元で「落駕山」「羅家山」と呼ばれていた海拔百十八メートルの山に「珞珈山」という洒落た名前をつけたのも聞一多であったという（珞珈、硬い玉飾の意）。今回のシンポジウム会場はキャンパス内の最も高い場所に建てられた招待所で、その名は「珞珈山荘」である。周囲は深い緑に囲まれ、建物の最上階から広大な東湖が一望でき、近代的総合大学の校舎内にあることを忘れさせるほどの、本物の「山荘」らしい雰囲気が漂う。

国際シンポジウムであるだけに、多くの専門家が集まり、国内各地から八十余名、海外から十一名、総勢百名ほどの規模であった。聞一多の息子で詩人の韦英（聞立雕）をはじめ、元河北省省長、湖北省委顧問委員会副主任、九十歳という高齢の李爾重（中国作家協会会員でもあり、代表作『新戦争與和平』、北京大学教授・孫玉石、武漢大学教授で中国聞一多研究会会長の陸耀東などが顔をそろえた。地元湖北をはじめ、北京、天津、河北、山西、陝西、江西、四川、湖南、江蘇、福建、広東、広西、雲南の各大学、研究所、新聞雑誌社から研究者、関係者が参加した。そのほか、香港演芸学院、台湾政治大学、シンガポール国立大学、日本の早稲田大学、九州大学、二松学舎大学、東洋大学、東京大学の研究者も出席した。初日は地元のメディアも駆けつけ、収容限度百五十人程の山荘会議室は立ち見もでる程の満員だった。

今回のシンポジウムに提出された論文は計四十一篇、そのうち大会報告は二十八篇で、ほかはグループ討論である。報告全体の内容は大まかに次の四つのテーマに分けられる。「新詩研究、聞一多の詩及びその創作理論」「聞一多の思想と人格」「聞一多の古典文学研究」「その他 史料研究、研究史研究」。紙幅の都合上、個々の報告を詳しく紹介することができない。以下、発表の順番にはこだわらず、各テーマについて大会報告論文の概要のみを述べた上で、現在中国における聞一多研究の特徴を指摘することにする。（会議中、予定された発表日程と発表者に少なからぬ変更

があり、また発表者の中には論文未提出者もいたため、筆者のまとめに実際の進行と多少の齟齬をきたすこともありうるが、ご了承いただきたいと思う。

新詩研究、聞一多の詩及びその創作理論

[1] 新人文主義与聞一多的『詩的格律』(厦門大学 俞兆平)

聞一多の「詩的格律」が生まれた学理的背景(原文:「学理動因」、新月派が「格律」「規律」を重んじる理論的背景について考察したものである。俞氏はこの問題を中国近代文化思潮変遷の大きな流れにおいて捉え、バビッドの新人文主義の影響を受けた、学衡派(梅光迪、吳宓ら)から新月派(梁実秋ら)へという、近代中国における古典主義思潮をその背景とする。同論文では、古典主義とは無論、中国伝統対西洋という単純な図式ではなく、「伝統文化から現代的意義を發掘する」「東西文化の真髓の結合体」であると指摘する。

[2] 「文学是生命底表現」——聞一多詩学思想探源(武漢大学 陳国恩)

初期の唯美的形式主義から人民を重んじる晩年の現実主義へと發展するというのは、聞一多詩歌理論研究における従来の常識である。これに対して陳氏は新たに「文学是生命底表現」など、詩の創作において生命的体験を重んじる聞一多の一面に注目し、「個人生命体験的生命詩学」こそが聞一多の生涯に通底する、彼の詩歌理論を支えた思想であると指摘する。

[3] 浪漫的、古典的与現代的:聞一多詩学傾向的多元性与統一性(天津師範大学 張林傑)

聞一多の詩歌理論及びその詩に現れるイメージの検証を通じて、聞一多詩論と創作における「ロマン的」「古典的」

「現代的」な要素は決して衝突し矛盾するものではなく、共存する関連性（多元性と統一性）をもつと指摘する。例えば詩における「感情の節制」の強調、「自我の表現」への否定という聞一多の主張は古典主義的であるが、一方それは現代主義がロマン主義に対抗する手段でもあり、また三〇〜四〇年代の中国新詩における現代主義の出発点でもある。

[4] 聞一多詩学的価値（四川師範大学 曹万生）

現代漢語詩歌の詩体建設という視点から、聞一多の詩歌理論の価値を検証する。聞一多の貢献は主に二つの面にあると指摘している。一つは新詩の形式において基本的な方向を定めたこと。「中西詩学」の融合を基本に新詩の形式を考案し、自ら創作も試みた。九十年来の新詩の歴史から見ると、新詩の詩体が非形式から形式化へと発展する基本的な方向が確認できる。もう一つはその理論を以って新詩を批評、指導したことである。

[5] 尋覓新詩的「原質」——聞一多新詩理論綜論（肇慶学院 鲍昌宝）

「格律化」（純詩化）と「非詩化」はそれぞれ聞一多が二〇年代と四〇年代に唱えた詩歌理論である。この二者は中国新詩における重要な矛盾、すなわち現実社会の詩に対する関与（他治）と詩自身の形式化処理という芸術過程（「自治」）との矛盾を有すると指摘している。「非詩化」と「純詩化」は新詩の発展における二つの内在的衝動と要求であり、新詩の歴史はすなわち二者の交替の歴史であると論じている。

[6] 論聞一多新詩批評的中国伝統文化内核（涪陵師範学院 魏洪丘）

聞一多の詩歌理論と創作は通常に言われる「中西芸術結婚後産生的寧馨兒」ではなく、中国文化伝統がその基本的中核であると指摘する。詩の「三美」の主張はそれぞれ伝統詩歌理論に基づいて美学的に発展した理念であり、また当時の新詩ないし一部の詩人、詩作に対する批判、詩における「時代性」「民族性」の強調も、伝統的な詩歌観念の

新しい時代における発展であると論じる。

[7] 聞一多後期詩歌「黒色」 意象的詩学闡釈（西南師範大学中国詩学研究中心 呂進 李冰封）

後期の聞一多詩（『死水』とそれ以後）によく歌われる「死」「愁」「鬼」のイメージ分析を通じて、前期の「紅」とは対象的に、「黒色」イメージを聞詩後期の特徴として提示する。現実の厳しさと生命の虚無感に直面する聞一多は日常と伝統イメージに対抗して「黒色」に審美的意義と内容を付し、「黒色」的イメージをもって世界と人生を検証しようとしていると、論じている。

[8] 唯美、頹廢和愛国的統一——聞一多『死水』論（湛江海洋大学 李樂平）

『死水』は「唯美、頹廢、愛国」の要素が統一された詩集であると論じる。それは伝統と西洋の影響を受け、情緒表現においては現代主義であり、形式表現では象徴主義、芸術追求では唯美主義、内容表現では現実主義であると指摘する。

[9] 『死水』的現代詩的精神的經驗（陝西師範大学 程国君）

現代詩を理解するには、「古典美学」「純文学」といった観点のみではなく、「精神的經驗」も重要な部分である。『死水』はすでに現代詩の精神的經驗を備えている。例えばその「悪の花」のような審醜意識、反抗的な經驗と否定的情緒。これらの精神的な經驗から『死水』は、詩の内在的本質において中国現代主義詩歌の出発点として位置づけられる。

[10] 聞一多『女神』批評与『紅燭』創作論考（重慶工商大学 劉静 『重慶日報』 万龍生）

郭沫若『女神』に対する聞一多の批評を分析することによって、その批評において聞一多が示した詩歌理論がいかに彼自身の詩集『紅燭』に実践されているかを、論じている。

[1] 試談沈従文論聞一多（湖南科技大学 吳投文）

聞一多について言及した沈従文のいくつかの文章を丁寧に辿り、同じ「新月派」という文学背景をもつものとして、沈従文は聞一多の格律詩に対して十分な理解と肯定を示し、同じ「新月派」詩人の徐志摩や朱湘らと比較して、聞一多詩の特徴は「詩人としての人生観の独自の独自な見解を忘れない」こと、「描写」以外に「解釈」を重視すること、「自己の觀念を詩の中に処置する方法」を持つことにあると、独特な批評スタイルによって把握している。しかし、沈従文の詩歌批評は印象式批評であるため、時には強い主観感情に左右され、一方的に偏る嫌いもあると、吳氏は指摘している。

[12] 二〇年代泰戈爾的接受以及聞一多格律詩的變奏——以「人格」・鄭振鐸・徐志摩・「黑屋」為媒介（東京大学 鄧捷）

一九二四年タゴール訪中時の賛成派の徐志摩と反対派の聞一多。一九二六年以後、この両者によって格律詩運動が展開された結果、聞一多は「必然」的に「新月派」の一人としてタゴールと関連付けられてしまう。この文学史における「不自然」な「必然」は何を物語るのか。論文はタゴール受容のキーワードと思われる「Personality」の訳語「人格」の中国における使用状況の検証を通じて、鄭振鐸、徐志摩を中心に中国でのタゴール受容の側面を考察するとともに、「国家」への強い関心からタゴール文学に異論を唱える聞一多とその格律詩にも焦点を当てる。タゴールを一つの参照軸として、徐志摩の格律詩運動への参加により「格律詩派」が「新月詩派」へと変容する様子を浮き彫りにし、国民国家建設に当たって「個」と「国家」の觀念が相反しながらも一つに収束していく近代の葛藤を文学の一面において描いている。

聞一多の思想と人格

[13] 聞一多 民族主義思想的發生と特徴（武漢大学 方長安）

聞一多の愛国主義、民族主義思想は従来言われる「アメリカの人種差別」だけに由来するのではなく、その根本的な原因は文化面における西洋科学技術、物質文明への反感にあり、聞一多の民族主義思想は世界的「反現代」の流れにあつて、西洋的現代性に抵抗した結果であると論じる。また二〇、三〇年代は民族歴史、伝統文化を一つの完璧な完成体として捉えていたのに対し、四〇年代は復古主義への批判、自身の初期の民族主義思想への反省と整理が特徴である。中国の民族主義には主に二つの典型がある。一つは西洋の現代性をもって民族伝統文化を透視、批判する形であり、もう一つは民族伝統をもって西洋の現代性に抵抗する形である。前者から後者へというのは中国現代文化思潮の主流であるが、聞一多が辿ったのは後者から前者へという独特な軌跡である。

[14] 聞一多 的人性救国思想及実践（雲南師範大学 李光荣）

農民、民衆に「原始」的で「野蛮」な「獸性」を發見し、それを抗戦の力として提唱する三九年以後の聞一多の思想と行動を考察した上、それを聞一多の「人性救国思想」として整理している。

[15] 聞一多：民族主義的文化表達与思想实践（武漢大学 朱陽華）

民族主義の視点から聞一多思想の全体的構築を捉える試みである。「種族主義」「民族主義」「国家主義」といった概念の整理から着手して、現代中国の民族主義の發生と特徴を分析した上で、聞一多における民族主義は「文化主義」、「自由主義」、「唯美主義」の調和と融合が特徴であるとし、彼の民族主義は文化本位の民族国家理念であり、彼の古典文学研究は「学高於政」という中国自由主義知識人の伝統に符合した選択であり、また彼の唯美主義は「愛国」と

いう社会性を強調し、儒家思想を露呈していると指摘する。

[16] 論聞一多先生の文学創作思想（河北大学 河北経貿大学 劉惠文）

詩人、学者、闘士としての聞一多の生涯を概括し、その新詩創作、伝統文化の整理、中外文化の融合による新文化の創出に関する時代背景を分析し、聞一多の文芸創作、研究成果と文学創作思想を論じている。

[17] 「走屈原的路」——論抗戦時期聞一多的生存方式（重慶師範大学 李文平）

「同人民接近」（屈原式の民衆への接近）、「何妨一下楼」（古典文化研究とそれに基づく民族文化と文学の提唱）、「素不好虚偽」（誠実で率直な人格）、「手工业労働者」（困難な環境で自力で生活を立てる）の四つの側面から抗戦時期の聞一多の学者としての生き方を分析する。

[18] 聞一多：愛的耕耘者（江西師範大学 林碧珍）

愛が聞一多の生命存在の本体であり、それは主に祖国に対する愛（伝統文化の賛美、民族主義、古典文学研究）と人民に対する愛（家庭、妻子への愛、民衆への関心）の二つの部分に表れていると指摘する。

[19] 聞一多的美学人格和美学風格——略論聞一多的力美型人格結構的形態（山西雁北師範学院 劉殿祥）

聞一多の人格について、「文化人格」（朱自清）と「政治人格」（毛沢東）といった従来の指摘のほかに、「美学人格」も具わっていると劉氏は論じる。聞一多の生涯にわたる創作活動、学術研究、現実闘争が、「青春型芸術美人格」「歴史型文化美人格」「戦闘型社会美人格」を包括した美学的的人格構造を作り上げた。それらは対立しながら統一しており、矛盾の中での生成と生成の中での矛盾を繰り返して、一種の「力美的風格」を呈している。

[20] 談聞一多学者型的特殊人格（雲南師範大学西南聯大研究所 李金芳）

詩人、学者、民主闘士といわれる聞一多であるが、彼は普通の詩人、学者、闘士ではなく、「芸術家型詩人」であ

り、「詩人型学者」であり、「学者型民主闘士」であると強調する。主に聞一多の「治学風格」「学者情懷」「大師形象」について具体的に論じている。

[21] 従「紅燭心火」到「火炬燃燒」看聞一多独特人格魅力（雲南師範大学西南聯大研究所 閻玉堂）

聞一多詩「紅燭」の詩句「心火發光之期」「燒破世人底夢」「不息地流向人間」を象徴的に用いて、「向外走」から「向内走」、また「向外走」へといった言い方で概括される聞一多の一生を敷衍し、その人格の魅力と偉大さを述べている。

[22] 聞一多与新文化運動（日中文化信息協会 石義師）

新文化運動史における聞一多の影響と地位についての考察である。陳独秀、魯迅、郭沫若などの新文化運動の代表人物と比較し、聞一多の思想、精神、文学貢献と人格の魅力は、最も新文化運動の健全で正確な方向を代表していると述べる。

聞一多の古典文学研究

[23] 古代「詩」的流变——聞一多的古代文学史构想（二）（二松学舎大学 牧角悦子）

一九三九年に発表された聞一多の論文「歌興詩」と、未完の手稿として残された「中国上古文学」の中から、聞一多が古代の文学史をどのように構想し、また詩の發生とその生成發展をどのように跡付けたのかを考察する。「詩は史である」という聞一多の詩歌観は、中国における詩の歴史を考える上で非常に大きな意味を持つものだと指摘する。それは詩言志の伝統をかたくなに守った「詩」の系統とは別に、華麗で主情的な「うた」の流れは「夷」的文化

を源流とするのではないかと示唆するものである。建安の文学、殊に曹操の樂府、そして五言詩こそ、この「詩」と「うた」の系譜が合流合体した、初めての抒情詩の誕生と考えうると牧角氏は推論する。

[24] 聞一多古代文学研究特点略論（西南民族大学 徐希平）

聞一多の古代文学研究に論及する意義は、現代の研究水準に立つて具体的な得失を論断することにあるのではなく、聞一多が当時の状況において切り拓いた研究角度、視点、方法に注目することにあると述べた上、聞一多の古代文学研究の特徴として次の五点を指摘している——「目的を明確にし、歴史と未来を見据える」「真実を求める科学的精神と新しいものを切り拓く勇氣」「中国古代文学を發展史的に捉える」「中国古代文学の源泉を素朴な民間習俗と原始的な生命力に求める」「誠実で緻密な研究態度」。

[25] 聞一多的唐詩研究（武漢大学 龚賢）

聞一多の唐詩観を考察整理したものである。唐詩の發展が止揚過程であると同時に、一つの漸進過程でもある。聞一多は唐詩を唐代文化の背景において分析し、唐詩の發展を唐文化發展の一部として捉える。また、人格の分析を通して個々の詩人の詩風を論じるのも（「風格即人」、聞一多による唐詩研究の特徴の一つである）。

[26] 聞一多『九歌』研究的成就和風格（武漢大学 李利民）

聞一多は民俗学、神話学、社会学の角度から楚辭研究を行う。その「九歌」研究の成果は主に「九歌」の發生と変容、「九歌」の構造、その「人神恋愛」の背景を解明したことである。また、その研究の特徴として「思考の多様性」「研究方法の多様性」「解釈の独自性」「研究者としての現実への関心」が挙げられる。

その他 史料研究、研究史研究

[27] 聞一多之書信——英文篇（早稲田大学 鈴木義昭）

『聞一多全集』第二二巻——書信・日記・付録巻に収録されている第二八号「致親愛的朋友們」という英文書信についての考察である。今までほとんど言及されていないこの書信は、渡米直後に書かれた創作欲の旺盛な時期の手紙であり、当時の彼の思想と創作状況を知る重要な手掛かりであると鈴木氏は指摘する。イマジズムの紹介、胡適の「不主義」が独創ではないという発見、イマジズムの雑誌『Poetry』をモデルとして清華文学社の雑誌を作ろうとする考え、日本留学の希望、郭沫若への批判など、書信は興味深い内容となっている。

[28] 日本における聞一多研究について（東洋大学 野村英登）

主に坂口直樹氏「現代中国文学研究の五〇年」の研究成果に基づき、「戦後三十年」（一九四五～一九七七）、「文革後十年」（一九七七～一九八六）、「九〇年代」（一九八九～一九九五）、「最新の研究」（一九九六～二〇〇四）の四段階に分けて日本における聞一多研究の概況を紹介している。九〇年代以後は聞一多研究の躍進が比較的顕著になり、民国史研究、民国期文学史研究の一環として聞一多を研究する傾向が現れていると指摘している。

三日間にわたる会議は日程が隙間無く生まれ、報告者一人あたりに与えられた時間は十分程度で、ほとんど議論ができない状況だったが、このように個々の論文にあらためて目を通すと、近年来の中国における聞一多研究の特徴がはっきりとわかってくる。「自己肯定傾向」「対立軸の曖昧化」「文化保守主義（民族文化の肯定）」「非政治主義」「五四伝統への懐疑（現代への懐疑）」といった九〇年代以後の中国における文化的特徴は（尾崎文昭「はじめに」、『東

洋文化 特集 一九八〇—一九〇年代の中国文化の研究』八四、東京大学東洋文化研究所)、聞一多研究においても見て取れる。

聞一多「格律詩」理論について、その背景として新古典主義が提示され(論文[1])、中国伝統文化の影響も強調された(論文[6])。初期の形式主義(「純詩化」)から晩年の現実主義(「非詩化」)へという従来の発展論を超越するために、生命詩学が聞一多の詩歌思想に通底しているという議論(論文[2])や、「純詩化」と「非詩化」を新詩運動の内在的な張力として捉える試み(論文[5])も見られた。また、聞一多における「ロマン的」「古典的」「現代的」様相、「唯美、頹廢、愛国」の多面性は対立するのではなく、多元的な統一性をもつと強調する論述もある(論文[3][8])。

聞一多の思想人格研究に関しても、同様な傾向がある。聞一多の民族主義を世界的な反「現代性」の流れとして捉え(論文[13])、民族主義と「文化主義」「自由主義」「唯美主義」との調和および融合を聞一多の民族主義特徴と指摘する(論文[15])。聞一多の人格についても従来の「文化人格」「政治人格」のほかに、新たに「美学人格」という言い方が生まれる(論文[19])。また、熟考に欠けた極論ではあるが、聞一多は魯迅以上に新文化運動の旗手である、という論述も現れ、「五四伝統」への反旗を翻している(論文[22])。

聞一多古典文学研究については、その研究成果を現代の学問水準から批評するといった従来の方法を乗り越えて、聞一多の古典文学研究の特徴分析に集中しているように見える(論文[24][25][26])。

聞一多の詩、詩論、思想、人格を文学史的、文化史的に位置づけ、聞一多の生涯にわたる多くの矛盾と多様性を構造的に捉えようとするのは中国聞一多研究の基本的なスタンスであるように思う。これに対して今回日本側の研究報告はややマクロな把握にかけるものの、史実、データに基づいた堅実な論考が特徴である。

大勢の研究者が集まったシンポジウムは成功裡に終わったといえる。孫玉石教授が閉幕辞の中で今会議の多くの研究報告について全体的見解を述べた後、誠実な研究態度、先行研究に対する尊重などを丁重に強調する場面は異様に強く印象に残っている。難解な学術用語を振りかざし従来の研究成果を繰り返す報告が見られたのも事実である。

また、大会発表という形ではなく、コメンテーターとして活躍した研究者も少なくなかった。個人的に深く印象に残ったのは人民大学の張潔宇女史である。孫玉石教授の弟子であり、北京大学で文学博士号を取得した新詩研究の新進気鋭の若手学者である。『風雨情囚——郁達夫的女性世界』（河南人民出版社二〇〇三）、『荒原上的丁香——二〇世紀三〇年代北平「前線詩人」詩歌研究』（人民大学出版社二〇〇三）の著書がある。